

## (5) 教職員の配置

### ① 基本的な考え方

- ・ 下表1の標準法の欄は、各学年6学級（農業科2学科2学級、商業科2学科4学級）として、高校標準法（公立高等学校の適正配置及び教職員定数の標準等に関する法律）に基づき、算出したものである。
- ・ （試算）の欄は、農業科は唐津南高校農業科（2学級）、商業科は杵島商業高校（4学級）の配置状況（教諭数、持ち時間数）を参考に算出したものである。

<表1：教職員の配置予測>

|      | 校長 | 教諭  |     |     | 養護 | 実習 | 事務 | 合計 |
|------|----|-----|-----|-----|----|----|----|----|
|      | 教頭 | 普通科 | 農業科 | 商業科 | 教諭 | 助手 | 職員 |    |
| 標準法  | 2  | 52  |     |     | 1  | 11 | 5  | 71 |
| (試算) | —  | 23  | 12  | 17  | —  | —  | —  | —  |

### ② 教科別教諭配置の考え方

- ・ 下表2の（試算）の欄は、新高校（農業科と商業科を併置し、総合選択制を実施）において、効果的な教育活動を行う上で必要となる教科別の担当教諭の配置計画策定に当たっては、時間割（案）に基づき算出したものである。
- ・ 授業実施に当たっては、「個に応じた指導」が求められることから、1クラス2展開や2クラス3展開など展開授業の実施も可能となるよう、配慮した。

<表2：教科別教諭の配置予測>

| 教科名  | 普通教科 |    |    |    |    |    |    |    |    | 専門教科 |    |
|------|------|----|----|----|----|----|----|----|----|------|----|
|      | 国語   | 地歴 | 公民 | 数学 | 理科 | 保体 | 芸術 | 英語 | 家庭 | 農業   | 商業 |
| 試算   | 4    | 2  |    | 3  | 3  | 5  | 1  | 4  | 1  | 12   | 17 |
| (小計) | (23) |    |    |    |    |    |    |    |    | (29) |    |

## (6) 施設設備

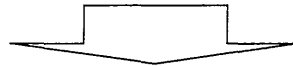
教育課程を踏まえ、新高校（商業科4学級、農業科2学級）において、効果的な教育活動を行う上で、必要となる施設設備について検討した。

### ① 基本的な考え方

- ・ 新高校の教育内容に基づいて、各学年、各クラスでの履修科目、単位数等から、模擬時間割を作成した上で、必要な施設を考える。
- ・ 新高校の必要面積を精査し、施設の併用についても検討した上で、不足する施設・設備を検討する。
- ・ 再編を行う学校の既存施設の有効活用及び改修を前提とするが、不足する施設については、新築や増築を含めて検討する。
- ・ 教室間の移動の効率化等を考慮し、農業施設が、校地内で著しい分散配置とならないよう配慮する。

### ② 必要となる施設設備（伊万里商業高校校地に新高校を設置した場合）

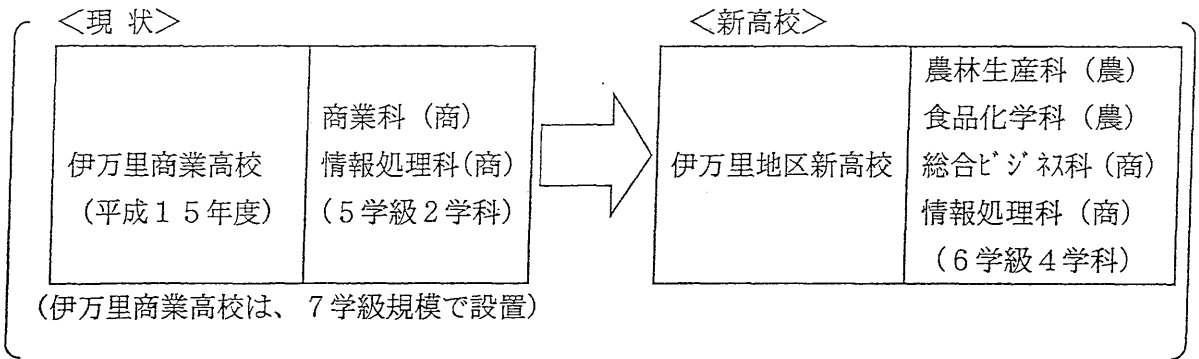
| 普通教室 | 普通科系特別教室                                   | 商業科系特別教室                    | 農業科系特別教室  | 農業関係実習施設                            |
|------|--|-----------------------------|---|-------------------------------------|
| 18室  | 理科実験室<br>調理実習室<br>被服実習室<br>美術教室<br>社会科教室など | 情報処理室<br>情報総合実習室<br>総合実践室など | 農産加工実習室<br>食品化学実験室<br>森林科学機械実習室<br>木材加工室<br>生物工学実習室など | 温室<br>収穫調整室<br>農具室<br>資材庫<br>搬送車庫など |



|                  |   |
|------------------|---|
| 現有施設で対応するもの      | 普通教室（農業科、商業科）、普通科系の特別教室、商業科系の実習教室                               |
| 施設の改修により対応するもの   | 食品化学実験室などの食品化学科実習棟の一部 など  |
| 新（増）築が必要と考えられるもの | 農産加工実習室などの食品化学科実習棟の一部<br>生物工学実習室などの農林生産科実習棟<br>温室などの農業関連実習施設 など |

※ 改修・新築の必要がある施設については、使用する生徒数の見込み等の決定後に、必要性、規模、利用方法等を含めて、改めて検討を行う。

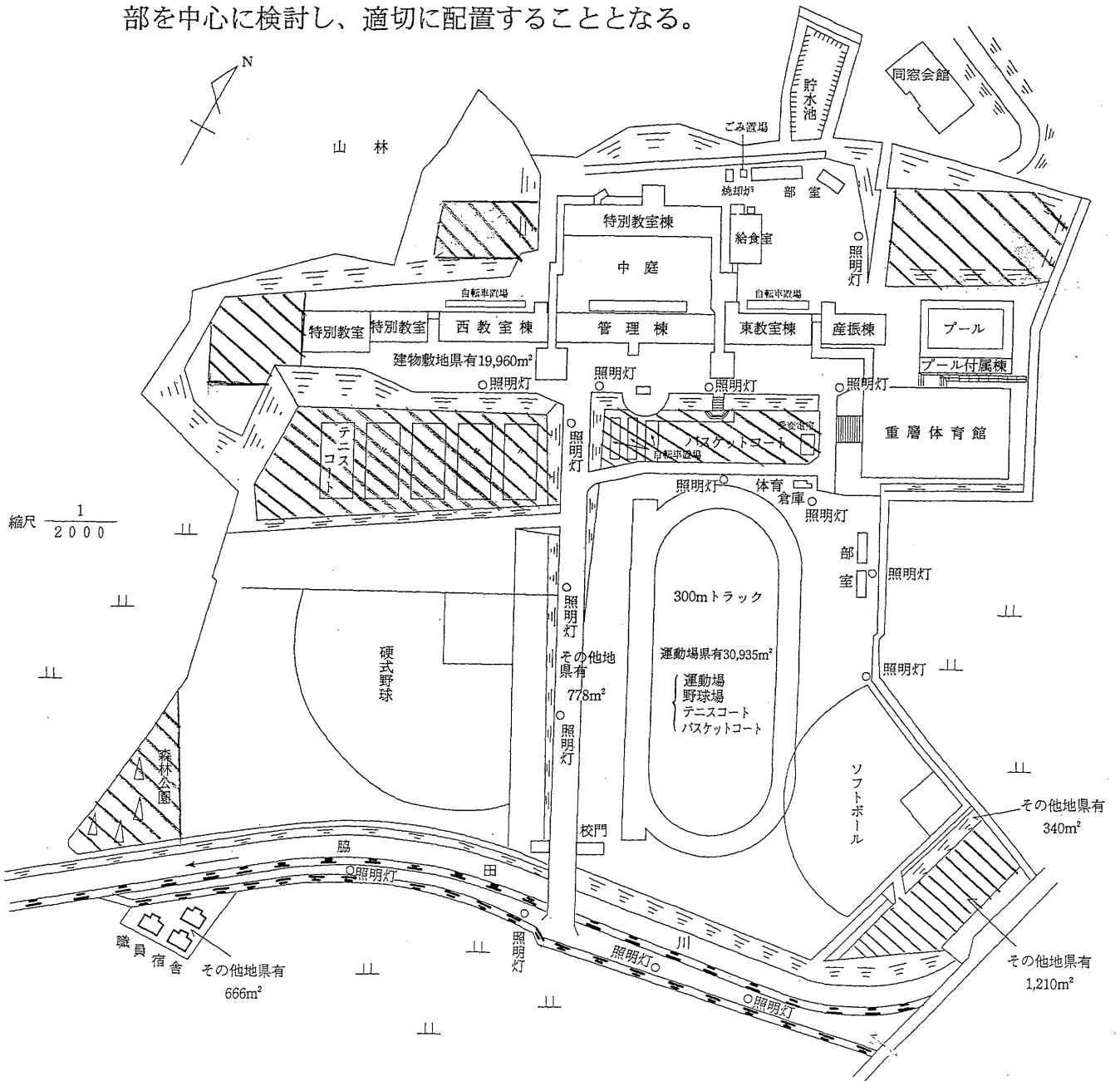
【参考】 学科配置状況の比較（伊万里商業高校、伊万里地区新高校）



③ 配置図面

＜伊万里商業高校の現況図＞

新高校に新たに必要となる施設及び実習地（圃場）については、下図の斜線部を中心に検討し、適切に配置することとなる。



## (7) 実習地までの生徒の移動対策

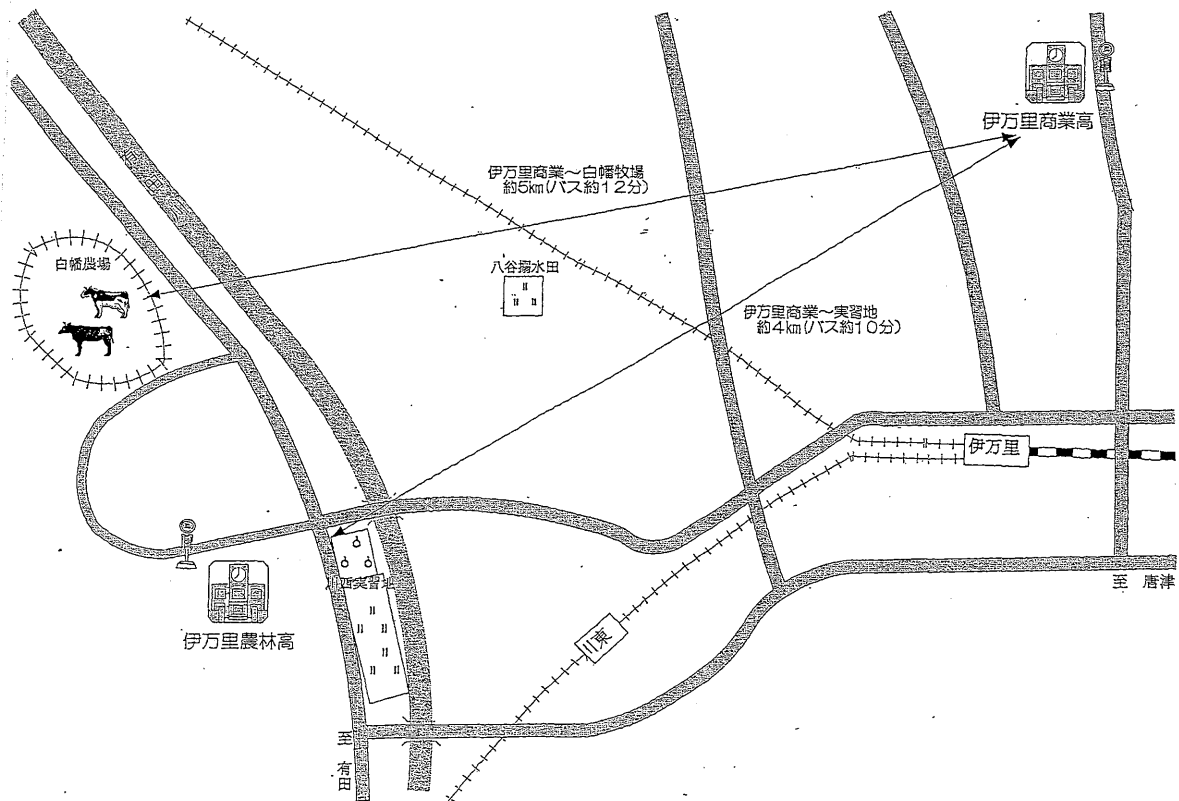
### ① 現状

農業科の生徒は、教室での座学以外に、水田、野菜園・果樹園などの圃場、牧場等において、農業関係のそれぞれの教科・科目の目標に応じて、実習を実施している。

現在、伊万里農林高校においては、生物生産科と食品化学科は、主に、下図の川西実習地（圃場）、八谷搦水田、白幡農場（牧場、野菜園、果樹園）を利用している。また、森林工学科は、校地内の林業圃場及び腰岳の演習林（伊万里農林高校から約5 Km、貸し切りバスで年8回程度移動）で実習を行っている。

### ② 課題

新高校を伊万里商業高校の校地に設置する場合、農林生産科と食品化学科の野菜、草花関係の実習については、主に、新高校の校地内に新設を検討している温室を利用することで対応できるが、水田圃場（米）、果樹園（なし、ブドウ）、露地野菜園（カボチャ等）及び、牧場などの実習地については、新高校の校地周辺に確保することは困難であるため、実習地までの生徒の移動が課題となる。



### ③ 対応策

- 新高校の校地から、現在の伊万里農林高校の実習地までは、約4～5 Kmあるため、生徒の移動については、スクールバスで生徒の輸送に当たることを検討する。
- 新高校の校地（伊万里商業高校校地）から、川西圃場を経由して、白幡（牧場、果樹園）までの経路（往復）で、生徒を輸送する（実所要時間：片道10分程度）必要があるため、その移動時間を確保する必要があるものの、引き続き必要な実習を行うことが可能である。
- なお、1年生については、学校生活に慣れる必要があることや、日常的に実験観察ができる環境を提供する必要があることなどから、新高校の校地内に「農業科学基礎」等で利用する圃場を設置することにより、総合実習など一部のグループ学習を除けば、基本的にバスで移動する必要はない。
- 一方、2，3年生については、畜産（動物）、果樹分野は、バス移動で対応する。
- この場合、実習時間をまとめるなどの工夫を行うことにより、ある程度、移動時間や休み時間を確保できる。
- バス移動に係る時間割（資料参照）を作成し検討したが、授業中については、1週間で延べ18時間（9往復）であり、基本的に大型バス1台で対応できる見込である。  
 なお、演習林における終日演習等のために臨時に運行することも可能となる。

伊万里地区新高校のバス輸送計画に係る時間割(案)

|   | 曜日                     | 月                           |                            |                          | 火                           |                     | 水                    |                      |                            | 木                   |                            | 金                            |                            |                             |                      |                            |
|---|------------------------|-----------------------------|----------------------------|--------------------------|-----------------------------|---------------------|----------------------|----------------------|----------------------------|---------------------|----------------------------|------------------------------|----------------------------|-----------------------------|----------------------|----------------------------|
| 1 | 教科<br>実習地<br>人数<br>実習率 |                             |                            |                          |                             |                     |                      |                      |                            |                     |                            |                              |                            |                             |                      |                            |
| 2 | 教科<br>実習地<br>人数<br>実習率 |                             |                            |                          |                             |                     |                      |                      |                            |                     |                            |                              |                            |                             |                      |                            |
| 3 | 教科<br>実習地<br>人数<br>実習率 | 動ハ付2<br>白幡(牧)<br>15<br>56.0 | 野菜2<br>白幡(野)<br>15<br>4.0  | 作物3<br>川西圃場<br>40<br>100 | 総実1<br>白幡(野・果)<br>30<br>100 | 総実1<br>林業圃場<br>70.0 | 総実2<br>川西圃場<br>100   | 総実2<br>白幡(果)<br>100  | 総実2<br>白幡(野)<br>30<br>41.0 | 総実2<br>林業圃場<br>70.0 | 果樹2<br>白幡(果)<br>15<br>58.0 | 動物科2<br>白幡(牧)<br>15<br>※40.0 | 畜産2<br>白幡(牧)<br>15<br>80.0 | 森林科2<br>林業圃場<br>10<br>※50.0 |                      |                            |
| 4 | 教科<br>実習地<br>人数<br>実習率 | 動ハ付2<br>白幡(牧)<br>15<br>56.0 | 野菜2<br>白幡(野)<br>15<br>4.0  | 作物3<br>川西圃場<br>40<br>100 | 総実1<br>白幡(野・果)<br>30<br>100 | 総実1<br>林業圃場<br>70.0 | 総実2<br>川西圃場<br>100   | 総実2<br>白幡(果)<br>100  | 総実2<br>白幡(野)<br>30<br>41.0 | 総実2<br>林業圃場<br>70.0 | 果樹2<br>白幡(果)<br>15<br>58.0 | 動物科2<br>白幡(牧)<br>15<br>※40.0 | 畜産2<br>白幡(牧)<br>15<br>80.0 | 森林科2<br>林業圃場<br>10<br>※50.0 |                      |                            |
| 5 | 教科<br>実習地<br>人数<br>実習率 | 動ハ付3<br>白幡(牧)<br>※56.0      | 果樹3<br>白幡(果)<br>25<br>90.0 | 野菜3<br>白幡(野)<br>13.0     | 課研B3<br>白幡<br>25<br>28~100  |                     | 果樹3<br>白幡(果)<br>90.0 | 畜産3<br>白幡(牧)<br>86.0 | 森林3<br>林業圃場<br>35<br>55.0  |                     |                            | 野菜3<br>白幡(野)<br>12.0         | 果樹3<br>白幡(果)<br>74.0       | 動物科3<br>白幡(牧)<br>30<br>72.0 | 造園3<br>林業圃場<br>※30.0 | 課研C3<br>白幡圃場<br>10<br>20.0 |
| 6 | 教科<br>実習地<br>人数<br>実習率 | 動ハ付3<br>白幡(牧)<br>※56.0      | 果樹3<br>白幡(果)<br>25<br>90.0 | 野菜3<br>白幡(野)<br>13.0     | 課研B3<br>白幡<br>25<br>28~100  |                     | 果樹3<br>白幡(果)<br>90.0 | 畜産3<br>白幡(牧)<br>86.0 | 森林3<br>林業圃場<br>35<br>55.0  |                     |                            | 野菜3<br>白幡(野)<br>12.0         | 果樹3<br>白幡(果)<br>74.0       | 動物科3<br>白幡(牧)<br>30<br>72.0 | 造園3<br>林業圃場<br>※30.0 | 課研C3<br>白幡圃場<br>10<br>20.0 |

① 教科名の後の数字は学年を表す。  
 ② 実習率は、表示された実習地における実施率である。（平成15年度実績（指導管理簿）による。）  
 ③ 人数は、利用が見込まれる最大の人数を示した。  
 ④ ※印は、平成16年度から開始される新科目で、利用率は見込。

## (8) 具体像に対する効果と課題の整理

教育内容や施設整備など、再編に伴う新高校の具体像について検討してきたが、その効果と課題については、以下の通りである。

### ① 設置学科について

- 農業科は2学級2学科（農林生産科、食品化学科）を置き、選択授業で対応することから、現在の3学科（生物生産科、食品化学科、森林工学科）とほぼ同等の教育内容を維持することが可能である。
- また、商業科についても、4学級2学科（総合ビジネス科、情報処理科）とするが、両科の有機的なつながりを深めるなどの対応を図ることにより、現在（商業科、情報処理科）とほぼ同等の教育内容を維持することが可能である。
- 農業科と商業科の内容を融合した教育内容や学校行事を設けることで、農産物の生産から販売までの一貫した教育が可能となるとともに、流通に精通した農業従事者、原材料について理解のある商業従事者など、視野の広い人材を作り出すことができる。

### ② 総合選択制

- 生徒一人一人が、所属する学科の学習を重点的に行いながら、自分の進路希望や興味関心等に応じて、「自学科科目」、「他学科科目」、「普通科目」から選択が可能となることから、社会の変化や生徒・保護者のニーズの多様化への対応が容易となり、幅広い進路希望への対応が容易になる。
- 同一時間に同一科目を、両科（農業科、商業科）の学科の生徒が、同時に選択できるようになることから、生徒相互のコミュニケーションの機会が増える。また、異なる学科の生徒が同一の学校で学ぶことにより、互いの理解が深まるとともに、多面的に幅広く物事を考える習慣が身につく。
- 総合選択制の趣旨を生かした効果的な運用のためには、生徒に多様な選択肢（選択科目）を提供し、農業科（または商業科）の生徒が、自学科科目だけでなく他学科科目や普通教科科目も履修することを可能にするとともに、効果的な運用のための事前（選択前年度）のきめ細かな科目ガイダンスの実施や非常勤講師の確保などの配慮・検討が必要になる。
- より専門性の高い資格等の取得（測量士補など）には、専門科目の修得要件等の条件はあるが、総合選択科目の中に、履修が前提となっている専門科目を取り込むなどの工夫で対応は可能である。

### ③ 学習環境について

- 生徒減少の中でも、適正規模の人数確保が可能となり、生徒間の個性のふれあいや、生徒同士の切磋琢磨の機会の確保など、学校の活力や教育の面で、よりよい学習環境の提供が可能となる。

④ 教職員配置について

- 1学年6学級規模が維持されることから、一定数の教員が確保され、普通教科、専門教科ともに、多様な選択科目の設定や、教科別の展開授業（少人数指導、チームティーチング等）など、個に応じた指導も容易となる。
- 顧問の確保が容易になることから、小規模校に比べ、より多くの種類の部活動の設置が可能となる。

⑤ 施設・設備等

- 伊万里商業高校校地に、実習等に必要な農業関連施設を整備することが必要となる。
- 伊万里商業高校の授業及び部活動で利用している練習場（テニスコート）に施設を配置する場合は、代替練習場等を確保する必要がある。

⑥ バス移動による課題について

- 伊万里地区新高校の校地である伊万里商業高校校地から、農場、牧場等の実習地まで、概ね4～5 Kmの距離を生徒が通うことが必要となるが、スクールバスを運行することや、時間割を工夫することなどにより、必要な実習の実施は可能である。
- 生徒の観察・管理の体験・学習等に支障がないよう、バス移動の際の移動時間を確保するなど、校時の設定を工夫して休み時間の取り方等を検討する必要がある。

⑦ その他

- 生徒会活動や教育課程に位置づけられた農業クラブ活動などを活用し、相互に交流・理解を図ることにより充実・発展が期待できる。
- 小規模の学校では、生徒の部活動に対する多様なニーズに応じられなくなる場合も出てきたり、人数不足で十分な練習や試合ができないなどの課題が生じることもあるが、適正規模の学校になることにより、部活動面の活性化にもつながる。
- 両学科には、それぞれ特有の行事や活動（農業系や商業系の技能審査、実習等）があることから、両科の特徴を損なわないよう、実施時期や場所等について配慮する必要がある。

## (9) 地域関係者等との意見交換の概要

伊万里地区新高校の在り方に関して、地元関係者、同窓会、PTAからの意見を求めた。その主な意見・要望と、それに対する県教育委員会の基本的な考え方について意見交換を行ったが、その概要については、以下の通りである。

### (意見・要望1＝単独校としての存続について)

学級減の必要性については認識しているが、伊万里商業高校と伊万里農林高校の統合はなじまない。小規模になっても伊万里農林高校存続の方法はあると考える。小規模校でも、専門的な特色ある教育が実現できる学校として、(両校を)それぞれ単独で存続して欲しい。

### 〔再編の考え方〕

- 伊万里商業高校と伊万里農林高校の再編計画については、長期的かつ大幅な生徒減少が進む中で、今後、両校とも学校の小規模化が進み、学校の活力や教育効果の面で、いろいろな課題が生じる恐れがあることから、検討がなされたものである。
- 例えば、生徒減の状況であるが、平成11年度に228学級であったのが、平成16年度は192学級と36学級減少しており、平成23年度には、さらに、168学級程度まで減少する見込みであり、伊万里地区についても、平成23年度までには、伊万里商業高校4学級、伊万里農林高校2学級規模となることが見込まれている。

### 〔小規模校の課題〕

- 小規模校が抱える課題については、例えば、4学級規模の農業高校と2学級規模の農業高校を比較すると、まず、配置できる教諭の人数が、4学級の農業高校では35人であるのに対し、小規模校である2学級の農業高校では19人と少なくなる。その内の普通教科の教諭の数では、4学級では18人程度であるが、2学級になると9人程度である。これは、国語、地歴、数学などの普通教科にそれぞれ1名程度しか配置できない人数である。
- 生徒は多くの教師との出会いによって、様々な刺激や啓発を受け、自分の個性や才能を磨いていくが、教師の数が少なくなることにより、いろいろな面で課題が生じることになる。

### 〔教育指導面の課題〕

- 例えば、教育指導面の課題としては、教諭の数が少なくなれば、開講できる教科や科目が限られるといったことが出てくる。
- 地歴・公民や理科などでは、それぞれ1人で担当する場合がでてくるため、選択科目数が少なくなり、地理を勉強したいのに日本史しか選べないなどといったことも生じる。
- 専門教科においても、教諭数が少なくなることから、開講できる科目数が限定されることとなり、生徒の多様な進路希望や資格取得に応えることが難しくなる場合がある。
- また、近年、生徒の学力幅が大きくなっていることへの対応策として、1つのクラスを2つに分けて行う少人数指導や習熟度別指導、さらには進学や就職のための特別指導等のきめ細かな学習指導に取り組むことが難しくなる場合が出てくる。
- さらに、教員の数が少ないと、学級担任や進路指導担当、生徒指導担当など、いろいろな種類の学校の仕事(校務)を掛け持ちせざるを得なくなり、例えば、進路指導や生徒指導による出張のため、担任としての指導が十分できないなど、学校の運営がス



ムースに進みにくくなったり、教員の教材研究や研修等の時間が十分取れないといったことなども出てくるおそれもある。

- また、教員が受け持つ部活動の顧問（指導者、監督）の数が限られることから、部活動の種類を限定せざるを得ないといったことも出てくる。

〔学校の活力面の課題〕

- 次に、学校の活力面での課題としては、小規模の学校では、多くの友人との出会いや勉学の面やスポーツの面で切磋琢磨の機会が減少したり、また、体育祭や文化祭などの学校行事も、どうしても活気がなくなる恐れがある。
- さらに、活気ある部活動の展開が難しくなる。例えば、県内の4学級の学校の体育系の部活動の平均は11部となっているが、2学級の学校では8部と限定され、生徒の部活動に対するニーズに応えられなくなる場合も出てくる。また、部員の数も4学級の学校の21人に対し、2学級の学校では平均10人程度と少ないため、十分な活動が難しくなる恐れがある。
- 以上のように、単独校として存続しようとした場合、いろいろな課題や問題が生じる恐れがあり、子どもたちにとって、教育環境としてどうかということを考える必要がある。

〔新高校の姿〕

- こうしたことから、計画では、両校を再編統合し、適正規模の学校にするとともに、新高校には、農業科と商業科を併置し、それぞれの学科の専門性はしっかりと維持しながら、他の学科の内容も学べる総合選択制を導入するとしたものである。
- 総合選択制は、複数の専門学科を併置することにより、生徒は自分が所属する学科の学習を重点的に行いながらも、本人が希望する場合、学科の枠を越えて、幅広い教科・科目の選択履修が可能となる制度である。
- 現在の農業は、農作物の生産だけではなく、流通等についての学習も重要である。一方、商業においても、流通過程で取扱う商品が、どのように生産されているかを学ぶことは重要である。このようなことから、農業と商業の学習内容を相互に補完する形で学習することは、これからの産業のニーズに応えていく上でも重要である。
- 伊万里地区新高校においても、総合選択制を活用し、専門性はしっかりと維持しながら、生徒が希望すれば、農業教育、商業教育の枠内だけに止まらず、農産物の生産・流通・販売まで含めた学習も可能となり、幅広い視野で学習に取り組むことが可能になるものと考えている。
- また、昨年10月実施した中学生へのアンケート調査結果でも、「複数学科を併置して、所属する学科を専門的に学びながらも、他の学科の学習もできるように配置」という回答が全体の6割を越え、単独校がよいとする回答は1割未満に止まっている。
- 確かに再編が行われた場合、結果として、単独校ではなくなるが、総合学科高校などとは異なり、農業科（2学級）、商業科（4学級）はきちんと残ることから、両校がこれまで担ってきた学校の役割や特色は、従来どおり、しっかりと維持しながら、加えて、学校の活力や教育効果を維持する目的で、検討したものである。
- いずれにしても、伊万里地区新高校の再編計画については、現在、教育委員会で継続して検討を行っているところである。今後、新高校整備推進委員会の検討内容やアンケート調査の結果、学校関係者の意見、さらには、地域などからの意見・要望等も参考にしながら、総合的に検討するとともに、議論の過程等もオープンにし、情報提供や説明に努める

とともに、意見等も十分聞きながら、平成16年度中に、結論を得たいと考えている。

- 今後とも、これから高等学校で学ぶ生徒たちにとって、どのような学校・学科の配置が望ましいかという教育的観点から、慎重に検討を進めてまいりたい。

**(意見・要望2＝両校の再編統合について)**

伊万里商業高校と伊万里農林高校は歴史が古く、単に合理化ということで統合が進められてよいものかどうか。

- 県立高校の再編整備については、大幅な生徒減少や社会の大きな変化が進む中で、次代を担う子どもたちに、望ましい教育環境を確保するために取り組んでいる。
- 近年の大幅な生徒減少の中で、現在の県立高等学校の配置のままに対応していくと、全体的に学校の規模が縮小し、現時点での予測では、平成23年までに、伊万里商業高校は4学級、伊万里農林高校は2学級規模となる見込みである。
- このような小規模校においては、
  - ・ 多様な教科・科目を開講することや少人数指導などのきめ細かな教育指導を行うことが難しくなる
  - ・ 生徒間の多様な個性のふれあいや、生徒同士の切磋琢磨の機会が減少する
  - ・ 活気に満ちた学校行事の実施や、多様な部活動の展開が困難となるなど、学校の活力や教育効果等の面で、様々な課題が生じてくることが考えられる。
- このようなことから、高校の規模を適正化し、活力ある学校づくりや、教育面の指導の充実等を図っていくために、伊万里商業高校と伊万里農林高校の再編計画を検討したものであり、単に合理化ということで検討したものではない。
- 厳しい財政状況など、様々な面で変革が迫られる時代にあって、施設・設備や教職員に係る経費など、限られた県の教育予算を有効に活用する視点をもつことも、重要であるとは考えているが、そのことよりも、むしろ高校再編については、あくまでも、子どもたちの教育環境をどう確保していくか、という観点から検討しているものである。

**(意見・要望3＝少人数学級編制について)**

教育県佐賀、農業県佐賀という観点から、学級定数を減らして(少人数学級編制にして)でも両校を存続させてほしい。しばらくは、クラス定員の減で対応しながら、5年後、10年後を見すえて考えていくべきではないか。

- 大幅な生徒減少が進む中で、現在の県立高校の配置のままに対応していけば、全体的に学校の規模が縮小し、小規模校においては、
  - ・ 多様な教科・科目の設定やきめ細かな指導が難しくなる
  - ・ 生徒同士の切磋琢磨の機会が減少する
  - ・ 活気に満ちた学校行事や部活動の実施が困難となるなど、学校の活力や教育効果の面で様々な課題が生じてくると考えている。
- こうしたことから、県立高校の学級編制を、高校標準法(「公立高等学校の適正配置及び教職員定数の標準等に関する法律」)に沿って1学級40人を前提とし、県立高校の適正規模を1学年4学級から8学級として、高等学校の規模の適正化を図り、活力ある学校づ

くりや教育の質的充実を進めていくこととしている。

- 県立高校に少人数学級編制を導入して学級数の維持を図っても、各高等学校の生徒数が減少することには変わりはなく、様々な課題の解決にはつながらないと考えている。
- また、少人数学級にするため、その分、結果として、生徒減をする必要がない高校の募集定員の数を減らすということになり、その高校を志望している生徒が不利益を受けることにもなる。さらに、生徒のニーズ等を反映した目標となる学科構成比とも乖離が生じることにもなる。
- したがって、現在、本県では、県立高校の学級編制については、1学級40人として、少人数授業や習熟度別授業等を実施するなど、きめ細かな教育指導に取り組んでいるところであり、今後とも、こうした点については、適切に対処してまいりたい。

#### (意見・要望4＝学級数の決定について)

生徒減での高校の統廃合はやむを得ないことではあるが、生徒の希望、地域の事情等を把握しながら、(各学科の)学級数を決めていただきたい。

普通科の定数を減らして、専門学科の定数を増やしてはどうだろうか。

伊万里高校を1学級減して、伊万里農林高校を3学級にしてはどうか。

- 現在の生徒数の減少見込みから、県立高校の募集定員は、平成23年度には、県全体で、平成16年度(192学級)から24学級減の168学級になる見込みであり、この中では、西部学区の減少が最も大きくなることを見込まれている。
- 伊万里商業高校と伊万里農高校については、現在、両校で8学級(5学級+3学級)であるが、生徒減の状況や、目標となる学科構成比の目安などから、平成23年度には6学級(4学級+2学級)程度まで減少することが見込まれる。
- こうした中で、御指摘のように、伊万里商業高校と伊万里農林高校の現時点の予測である「4学級+2学級」という学級数を、例えば、「4学級+3学級」とか「5学級+3学級」とするためには、全体の生徒数が減る中で、他校の学級数を、さらに大幅に減らさなければならぬことになる。
- 仮に、平成17年度に伊万里地区で1学級減する必要があるとすると、伊万里農林高校を1学級増するためには、これを埋め合わせるため、伊万里高校または、伊万里商業高校を更に学級減し、合わせて2学級の減をしないとイケなくなる。
- 一方、学級増の分を他地区から1学級分をもってくるとした場合、他地区の募集定員の減を必要以上に行うこととなる。
- こうしたことが、全体の生徒・保護者の学校・学科に対するニーズに合致するものかは、慎重な検討が必要である。
- また、生徒・保護者が本当にどのような学校・学科の配置を望んでいるかということについては、当然ながら、高校の試験倍率だけで判断できるものではない。
- このため、県立高校の募集定員については、地区の生徒減の状況や目標となる学科構成比、学級減の実施状況、そして、志願状況などを総合的に検討し、生徒・保護者のニーズ等を踏まえたものとなるよう、全県的・長期的観点から、毎年決定を行っているところである。

(意見・要望5＝地域の人材育成との関連について)

農業科2学級と商業科4学級を統合した場合の視点ではなく、伊万里高校、伊万里農林、伊万里商業、有田工業それらを含めて、この地域の人材をどう育てていくかという視点で考えていくべきである。この圏域の次の世代をどう育てていくかという視点こそが、子どものために立った視点である。

- 県立高校の再編整備については、少子化による大幅な生徒減少や社会の大きな変化が進む中で、次代を担う子どもたちに、望ましい教育環境を確保するために取り組んでいる。
- 近年の大幅な生徒減少の中で、現在の高等学校の配置のままに対応していくと、全体的に学校の規模が縮小し、現時点での予測では、平成23年までに、伊万里商業高校は4学級、伊万里農林高校は2学級規模となる見込みである。
- 特に小規模校においては、
  - ・ 多様な教科・科目を開講することや少人数指導などのきめ細かな教育指導を行うことが難しくなる
  - ・ 生徒間の多様な個性のふれあいや、生徒同士の切磋琢磨の機会が減少する
  - ・ 活気に満ちた学校行事の実施や、多様な部活動の展開が困難となるなど、学校の活力や教育効果等の面で、様々な課題が生じてくることが考えられる。
- このようなことから、高校の規模を適正化し、活力ある学校づくりや教育面の指導の充実等を図っていくために、伊万里商業高校と伊万里農林高校の再編計画を検討したものである。
- 具体的には、伊万里商業高校と伊万里農林高校を再編統合し、適正規模の学校にするとともに、新高校には、商業科と農業科を併置し、それぞれの学科の専門性はしっかりと維持しながら、他の学科の内容も学べる総合選択制を導入するとしたものである。
- 確かに、再編が行われた場合、結果として、農業科・商業科の単独校ではなくなり、他学科と併置することにはなるが、総合学科高校とは異なり、商業科(4学級)も農業科(2学級)も、きちんと残ることから、両校が、これまで担ってきた学校の役割や特色、例えば、地域を支える人材の育成などについては、従来どおり、しっかりと維持しながら、加えて、学校の活力や教育効果を確保する目的で、検討したものである。
- いずれにしても、再編計画の検討に当たっては、生徒・保護者等のニーズを踏まえ、「これから高等学校で学ぶ生徒にとって、どのような学校・学科の配置が一番望ましいか」という教育的見地を基本に、県全体の学校及び学科について、長期的・全県的観点から、バランスのとれた配置となるよう考えながら検討を進めているところである。

(意見・要望6＝検討の進め方について)

高校再編については、地域の実情、地域性を考え、原点に戻って、地域の意見を十分聴いてから再編整備の話をするべきではないか。また、情報を公開してほしい。

- 継続検討としている専門高校グループの再編計画については、現在、新高校整備推進委員会で、再編統合した場合の新高校の具体像や、その効果・課題等について、検討を行っている。
- 新高校整備推進委員会については公開とし、その開催予定及び結果概要については、県

のホームページで、随時お知らせしている。また、検討状況については、節目、節目で、マスコミ等を通じて情報提供を行っている。

- さらに、それぞれの新高校整備推進委員会において、地域や学校関係者等に対する意見聴取なども行ってきている。
- 今後、この新高校整備推進委員会の検討内容や、中学生の進路希望等に関するアンケート調査の結果、また、学校関係者の意見、さらには、地域などからの意見・要望等も参考にしながら、県教育委員会において、総合的に検討し、具体案を取りまとめたいたいと考えている。
- そして、その案については、説明会を実施するなど、県民への周知に努めるとともに、併せて、県民の意見や情報を把握し、また、検討経過の透明性の向上を図るため、県民意見提出手続（パブリック・コメント手続）を実施することとしたいと考えている。
- 専門高校グループの再編計画については、こうした手順や方法により、慎重に検討を行い、平成16年度中に、県教育委員会において決定を行うこととしたいと考えている。
- いずれにしても、県民、関係者などに対して、今後とも、情報提供や説明に努めるとともに、意見等も十分聞きながら、県立高校の再編整備について、検討を進めてまいりたい。

**（意見・要望7＝農業教育の圃場について）**

農業教育は圃場が近くになくてはいけないと思うが、どうか。

- 現計画に基づき伊万里商業高校と伊万里農林高校を再編統合とした場合、実習に必要な温室等の施設は、伊万里商業高校の校地内に整備する方向で検討を進めているが、農場、牧場等については、当面、現在の伊万里農林高校の実習地の活用を図っていくこととなると考えている。
- このため、伊万里地区新高校の校地である伊万里商業高校校地から、農場、牧場等の実習地まで、概ね4～5 Kmの距離を生徒が通うことが必要となり、実習の授業に支障を来さないよう、スクールバス等を運行することや、時間割を工夫することなどについて、伊万里地区新高校整備推進委員会において、具体的に検討を行っているところである。
- 例えば、バスで片道10分程度かかることとなるが、3時間目と4時間目の休み時間を延長（通常10分を20分程度に延長）したり、実習の時間をある程度まとめるなどの対策について、検討を行っているところであり、対応は可能と考えている。
- 農業教育に必要な圃場については、なるべく校地の近くにあることが望ましいところであるが、現計画を実施とした場合は、生徒の観察・管理の体験・学習等に支障がないようスクールバスの運行や柔軟なカリキュラム編成などの対応等をきちんと講じていかなければならないと考えている。

**（意見・要望8＝アンケート調査の方法について）**

県教育委員会では、昨年10月に県内の中学校3年生とその保護者を対象として、アンケート調査を実施されたところである。このアンケート調査は伊万里市の一部の中学校を抽出した結果であり、他の中学校を選べば違った結果になると思う。農業希望者3%というのは伊万里地区の現状を考えると少ない。伊万里市全体から抽出すれば、農業関係の希望は増

えていたのではないか。

- 中学生の進路希望等に関するアンケート調査については、県立高校の今後のあり方、とりわけ、新しいタイプの学校の設置希望や、農業科、家庭科に対するニーズ、配置のあり方などについて、今後の県立高校整備の検討の参考資料とするため、昨年10月、県内の中学校3年生（約1,600人）とその保護者を対象として調査を実施した。
- 今回のアンケート調査は、それぞれの地域におけるニーズ等を把握するものではなく、県全体としてのニーズ等を把握することを目的として行った。
- このため、アンケート調査の対象者の抽出については、一般的な統計的手法として、文部科学省が実施している「学習状況調査」などでも採用されている「無作為抽出法」によっており、県内の市町村立中学校から94校中21校を無作為抽出したうえで、更に該当校から、クラス単位で抽出して実施したものである。
- いずれにしても、このアンケート調査結果を、それぞれの地域について当てはめることは考えておらず、伊万里地区の再編計画の検討については、今後、新高校整備推進委員会の検討をはじめとして、様々な観点から、総合的に検討を進めることとしている。